Since 1805 文化二年
井筒八ッ橋本舗 華菓　井筒八ッ橋本舗　祇園町南側店

店舗づくりで伝える「京都の文化」への想い

京町家を店舗とされている「井筒八ッ橋本舗　祇園町南側店」。京町家まちづくりファンドにも寄附付き商品でご協力いただいています。京町家への想いや、新型コロナウイルスの感染拡大状況下でのお店の様子についてお話を伺いました。
（インタビュー協力：株式会社井筒八ッ橋本舗　社長室室長 津田一成氏、祇園本店店長 渡辺ゆかり氏、祇園町南側店店長 高尾純子氏）

古いものを大切にすること

井筒八ッ橋本舗は、京都の伝統文化を大切に残したいという強い想いを持っていました。社長とは旧知の間柄である、京町家所有者の市村さんの京町家保全への熱い想いを聞かせていただき、出店を決めました。

京町家まちづくりファンドへの支援等の、京町家を残す活動に協力することは、古いものを大切にする会社の姿勢を発信することにもつながると考えています。

京町家所有者の市村三吾さん（右）と井筒八ッ橋本舗の皆さん

苦しい状況を再出発の契機に

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、お店を閉めざるを得ない状況の際、店舗を単なる商品陳列の場ではなく、京町家を見ていただくための空間として見直しました。書類で一杯だった地下室を整理し「京町家 どうぞご覧ください」の看板を出し、説明資料も作成しました。京町家をPRすることで、京町家を保全したいと思う方を少しでも増やしたいと思っています。

新型コロナウイルスの影響は小さくはありませんが、京都の文化を残すためのきっかけとしたいと考えています。

井筒八ッ橋本舗　祇園町南側店
所在地　京都市東山区祇園町南側584　HP　https://www.yatsuhashi.co.jp/
京町家まちづくりファンド寄付付き商品　http://kyoto-machisen.jp/fund/shop/index.html

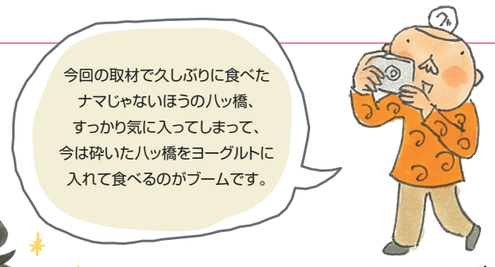
京都人㋜の京都知らず 編集後記

今回は四条通りに面する京町家でオモテが井筒八ツ橋祇園町南側店、オクが市村三吾さんの住まいとしている市村邸にグレゴリさんとともに訪れました。

市村邸は築100年以上で四条通りに面している大変貴重な京町家です。

今も２階には御茶屋格子が残っており、そのことから元々は御茶屋だったことが想像できます。京町家の重要な要素である「格子」は商売の種類によって用いられる形や加工法が異なり、おもなものとして格子上部に空間を作ることでより多くの光を取り込める糸屋格子、炭粉の飛散を防ぐため格子の間を狭くした炭屋格子、その他にも米屋格子、千本格子、欄間付格子などがあり、格子から京町家の歴史を垣間見ることができます。

昔の外観を残している京町家は少なくなってきてはいますが、京都の町を歩く時には、格子に注目をしてみてはいかがでしょうか。（宮浦）



著者：グレゴリ青山

漫画家、イラストレーター。1966年、京都市生まれ。壬生の地で生まれ育つ。現在は京都府亀岡市在住。京都が舞台の著書多数。「京都人㋜の京都知らず」を収録した『グレさんぽ 猫とかキモノとか京都とか』、文庫本『京都深ぼりさんぽ』が発売中です。

京まち工房 92
公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター

特集 P2-4 寄稿 「withコロナ時代」のまちづくり

CONTENTS

P1 京都人㋜の京都知らず
P5 リモート社会と地域まちづくり
P6 展覧会「Machiya Vision」
P7 コーディネーターのリモートワーク
P8 寄附付き商品・井筒八ッ橋本舗／京都人㋜の京都知らず 編集後記

令和2年度賛助会員募集中！

入会をご希望の方はまちセンにお問合せいただくか、ホームページをご覧ください

賛助団体の皆様			
「京ぐらし」ネットワーク	360°パノラマ画面企画・制作 ぐるっとVIEW	アルパック 株式会社 地域計画建築研究所	JR this is japan. ISETAN
「価値ある相続」をコーディネート 一般社団法人 相続相談センター	フラットエージェンシー	平安建材株式会社	京都駅ビル
京町家居住支援者会議	公益社団法人 京都市観光協会	ART GALLERY & RENTAL SPACE be-kyoto	株式会社都ハウジング
大阪ガス	一般社団法人 京都府不動産コンサルティング協会	RITSUMEIKAN	京町家をお探しします。株式会社 八清（ハチセ）
京都信用金庫	SAPPORO	中藏	京都でんき
京都中央信用金庫	住宅金融支援機構 Japan Housing Finance Agency		

公益財団法人
京都市景観・まちづくりセンター
〒600-8127
京都市下京区西木屋町通上ノ口上る
梅湊町83番地の1（河原町五条下る東側）
ひと・まち交流館 京都 地下1階
TEL：075-354-8701　FAX：075-354-8704
E-mail：machi.info@hitomachi-kyoto.jp
HP：http://kyoto-machisen.jp
HP
Facebook
京都市景観・まちづくりセンター　検索

※センターへお越しの場合は公共交通機関をご利用下さい。

KES ステップ1登録　この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！

公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンターは環境負荷低減に努めています。

ニュースレター 京まち工房 92
公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター

グレゴリ青山 京都人㋜の京都知らず その10 町家とハッ橋

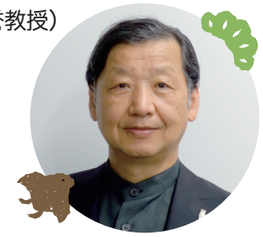
※「桔木（はねぎ）」とは、軒の出を「てこの原理」で受ける天秤状の部材のこと。

寄稿「withコロナ時代」のまちづくり

新型コロナウイルスの感染拡大は、まちづくりにも大きな影響を与えました。「withコロナ時代」のまちづくりはどのように変化するのでしょうか。当財団と関わりの深い、髙田光雄先生（京都美術工芸大学教授・京都大学名誉教授）、宗田好史先生（京都府立大学教授）、門内輝行先生（大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授）にご寄稿いただきました。

― 現実世界と仮想世界の交流を通じた生活圏の再構築 ―

髙田 光雄（京都美術工芸大学教授・京都大学名誉教授）



略歴　髙田 光雄（たかだ みつお）

1951年 京都市生まれ。京都大学、同大学院修了。専門は建築計画学、居住空間学。地域の歴史や文化を活かした住まい・まちづくりの実践的研究、少子高齢社会に対応したまちづくり、スケルトン・インフィル方式の住宅ストック再生への適用、地域居住文化に適合した環境配慮住宅設計などに取り組む。日本建築学会賞、都市住宅学会賞、日本建築士会連合賞など受賞多数。
都市住宅学会会長、京都府建築士会会長、京都市建築審査会会長、京都市住宅審議会会長、京都市京町家保全・継承審議会会長、都市居住推進研究会会長、京町家継承ネット代表、（公財）京都市景観・まちづくりセンター評議員など兼務。

コロナ禍の今年の夏は、祇園祭も大文字の送り火も規模を極力縮小して執り行われた。しかし、そのために、祭や送り火の本質が、かえって見えやすくなり、保存会ごとに異なる意思決定の結果が生み出した宵山や送り火の景観には、異なる価値観が共存する京都のまちづくりの蓄積が色濃く映し出されていた。

この状況下で、多数の人々が認識したことは身近な生活圏の再構築の必要性であったのではなかろうか。身の回りの物理的な環境、社会的な環境、仕事と暮らしの関係などが整っている事が真に豊かな生活の基本であることが再認識されたと言える。その上で、身近な生活圏の再構築に向けて5つの問題提起をしてみたい。

第1に、ネットワークのリ・デザイン。人は家だけではなく、まちに住んでいる。人と人との接触回避が強く求められる感染症拡大の中で、生活圏内のネットワークの重要性が再認識されるとともに、本当に必要な関係が明らかになってきている。デジタル技術の活用も考慮した上で、誰と、だけではなく、どのように繋がるのかという、ネットワーク・トポロジーにも関心を寄せる必要が強まっている。

第2に、自然との関係の確保。自然換気の重要性の再認識は言うまでもないが、stay homeが続く中、市街地でも身近に自然が存在する京都に住む幸せを感じた人は少なくなかった。さらに、住宅と自然との関係を強化し、身近な生活圏内で自然環境を保全、再生していくプログラムづくりの促進が必要である。

第3に、子どもの生活環境の重視。学校や保育所が休業となり、小さな子どもが、外遊びなどの、成長に不可欠な体験を重ねるための環境が、住宅やその周辺に、より強く求められるようになった。children firstの理念の下、子育て世帯だけのニーズではなく、社会全体のニーズとして、その整備に取り組まなければならない。

令和2年祇園祭宵山の景観
熟考の末、提灯を立てた町、立てない町が混在した

第4に、文化の継承と保護。歴史都市京都の生活文化は、多くの芸術・文化活動や伝統産業によって支えられ、継承されてきた。コロナ禍の下、いったん消えてしまえば再生不可能なかけがえのない活動・産業の継承が危ぶまれている。身近な生活圏の再生に当たっても、文化の継承と保護、とりわけ芸術・文化活動や伝統産業の若い担い手支援の視点が強く求められる。

第5に、デジタル化への対応。コロナ禍の下、テレワークやオンライン授業の普及、ビデオ通信の一般化などによって、高齢者を含む多くの人々のデジタルスキルは確実に向上した。これから急速に進むデジタル化社会を見据えて、対面が全てと考えられてきたまちづくり活動でもデジタル化の可能性は最大限検討されるべきである。一方、情報リテラシー学習など、デジタル化の課題への対応も急務である。その上で、上記の4点も含めて、現実世界と仮想世界の交流を通じた生活圏の再構築が今こそ推進されなければならない。

― 市民の連帯を進めるために ―

宗田 好史（京都府立大学教授）

略歴　宗田 好史（むねた よしふみ）

1956年浜松市生まれ。法政大学工学部建築学科、同大学院修了。ピサ大学、ローマ大学大学院留学、京都大学で工学博士。国際連合地域開発センター主任研究員、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）国内委員会理事、（公財）京都市景観・まちづくりセンター理事、特定非営利活動法人京町家再生研究会理事、特定非営利活動法人京都府地球温暖化防止府民会議理事などを務める。著書に『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり』（2000年）、『中心市街地の創造力』（2007年）、『創造都市のための観光振興』（2009年）、『町家再生の論理』（2009年）、『なぜイタリアの村は美しく元気なのか』（2012年）などがある。

感染拡大が止まらない。世界で2,530万人、死者は85万人（8月31日）だという。「まちづくりを一変させた」とはいうが、影響の全貌はまだ分からない。インバウンドが消え静かだと言う人は多いが、事態の深刻さは分からない。修学旅行も秋にも戻らないという。すでに減少していた日本人客もコロナで激減した。急増してはいたが、京都の市内総生産の観光依存度は、小さな観光地と違いまだ低かった。だがこの数年、非正規従業者が増えていた。零細な宿泊・飲食業界の苦境はパートや学生アルバイトにも深刻に及んだ。感染の世界的拡大の影響は全産業に及ぶ。医療機器や薬品、ITに期待する人もいるが、製造業は産業用ロボットとAIが雇用を奪っていた。だから、インバウンドが期待されたのだ。

よく言われるように、これまで密かに進んでいた変化をコロナ禍が一気に進める。阪神淡路大震災では空洞化が進んでいた神戸市長田区で、復興再開発、区画整理の規模が見直された。東日本大震災では東北の人口減少が一気に加速し、膨大な国費を費やした復興創生期間は今年度までだが、定住人口は確保されず、交流人口も増加していない。また、今まで米国中心だった国際経済の中国シフトは一層進むだろう。外需に依存する日本経済は顧客も従業員も外国人依存が高まった。観光だけがインバウンド頼みで済むはずもない。すでに世界中が中国抜きで成り立たない。

ヴェネツィア、サンタ・マリア・デッラ・サルーテ（衛生の聖母）聖堂

私の懸念は、コロナ禍で一人暮らしがさらに増加する点にある。全国の孤独死は年間推計2.7万人（2018年）、コロナ感染症の国内死者数約1,300人よりはるかに多い。コロナ孤独死もすでに十数人になった。産業の構造転換やリモートワークが進む陰で、取り残される人がいる。ここ数年で学生アルバイトが増えた分、コロナ禍で授業料減免申請者が増えた。オンライン授業で暇ができてもバイト探しに苦しんでいる。決して学生だけの話ではない。withコロナ社会の「新しい生活様式」に馴染む人の横で、適応できない大勢の市民が困窮している。その市民を取り残さないためにこそ、今まで育ててきたまちづくり力を発揮したい。

3.5万人もの死者を出したイタリアでは、ロックダウンで発揮された市民の連帯こそ都市の文化だという。withコロナ時代には広場や通りでの交流を再構築し、三密を避ける野外の礼拝堂、屋外の講堂や教室、そしてコハウジングを勧めている。今までの過密中の孤独でなく、離れても疎外感を感じない都市社会を創るという。

ヴェネツィアのサンマルコ広場の対岸、税関の隣に聳（そび）えるサンタ・マリア・デッラ・サルーテ聖堂は、1629年のペスト禍の復興事業で1681年、サルーテ（生命を衛る）の聖母マリアに捧げられた。ヴェネツィアの40日間の（クァランティーネ）船客隔離は検疫の語源となった。サルーテは乾杯の意味、お大事にとか健康、そして「衛生」を意味する。ヴェネツィア共和国はこの時代から、公衆衛生に加え、船乗やその家族の社会保障制度を始めた。都市の理念は互助にある。まちづくりは互助の仕組みづくりでもある。

※イタリア語で「40日間」を指すquarantena（クァランテーネ）は、英語で「検疫」を意味するquarantineの語源となった。

寄稿「with コロナ時代」のまちづくり

― コロナ後の世界を見据えたまちづくりに向けて ―

門内 輝行（大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授）

コロナ禍が始まった2月から半年間、初めての遠隔授業への対応に追われ、緊急事態宣言の解除後は一部対面授業も始まり、ソーシャルディスタンスの確保等の環境整備にも力を注ぎ、ようやく短い夏休みを迎えたところである。この間、ビデオ会議システムZoomのマニュアルを作成し、講義・実習を行ってきたが、リモート教育の可能性を発見できたことは大きな収穫であったと思う。ビジネスの世界でもテレワークで相当の仕事ができることが分かり、サイバー空間の活用が一気に加速したことは注目すべき社会的変化と言える。

ここで少し立ち止まって、コロナ禍によって顕在化した問題群、コロナと共存する方法、コロナ後の世界の見通しなどを視野に入れつつ、withコロナ時代のまちづくりについて考えてみる。まちづくりは人々の生命と暮らしを育む活動であるが、コロナ禍が日常世界を支えている社会・経済システムを根幹から揺るがしたことに目を向けなければならない。ステイホームも、生活に必要な物資を生産し運搬するエッセンシャルワーカーの活動によって成立している。コロナ禍で顕在化したこうした事実にまで遡（さかのぼ）って、生活の仕方を問い直すことが求められる。また、わざわざ出勤しなくてもできる仕事が多いこともコロナ禍によって明らかになった事実であり、コロナ後は「職住融合」が進む可能性がある。さらにDX（デジタルトランスフォーメーション）が進むと、「分散型都市」が増加するといった都市構造や国土構造の変化も遠望される。

略歴　門内 輝行（もんない てるゆき）

1950年、岡山県生まれ。博士（工学）。1973年京都大学工学部建築学科卒業、1975年東京大学大学院修士課程修了、1977年同博士課程中退、東京大学助手。1989年早稲田大学理工学部助教授、1997年同教授、2004年京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授を経て、2016年より現職（2017年より建築学科長）。京都市立芸術大学客員教授。専門は、建築・都市記号論、デザイン方法論、景観デザイン論。日本建築学会賞（論文）を受賞。京都市美観風致審議会会長、（公財）京都市景観・まちづくりセンター評議員等を務める。主な著書に『講座記号論3.記号としての芸術』勁草書房、1982年、『人間－環境系のデザイン』彰国社、1997年、『デザイン学概論』共立出版、2016年など。

コロナ禍の状況では集まること自体が難しいことも事実であるが、オンライン会議、ベランダを活用した演奏会などの多様な手段を導入すれば、ソーシャルディスタンスを確保しながら対話をすることが可能となる。こうした創意工夫により、コミュニティのメンバーシップを拡大したり、多くの専門家に参加してもらったりする可能性を拓くことができる。

コロナ後の世界を見据えると、自然との共存や他者との共生を目指す「ニューノーマル」を探求することが必須である。世界では欧州を中心に新型コロナウイルス感染拡大からの社会・経済の復興にあたり、単に元の世界に戻すのではなく、この機会を契機として脱炭素に向けた気候変動対策を推し進め、生態系や生物多様性の保全を通じて災害や感染症に対してもよりレジリエントな社会・経済システムへと移行していくという「グリーンリカバリー」（Green Recovery）の考え方が広まっているが、大変示唆に富む。コロナ後の未来社会に向けたまちづくりとしては、目の前の個別の問題に対応するだけではなく、人間生存のための空間づくりを可能にする都市エリアのビジョンを構築することが枢要な課題であると考える。

ビデオ会議システムを活用すれば、遠く離れた場所からでもまちづくり会議に参加できる
（大阪芸術大学建築学科における遠隔ガイダンスの様子。筆者も自宅から参加）

地域まちづくりの専門家にインタビュー

リモート社会と地域まちづくり

コロナ禍により、地域活動は停滞を余儀なくされました。一方で社会ではリモートへの転換を模索する動きもあり、地域まちづくりに与える影響が注目されています。

今回は、地域まちづくりの専門家として活動されているNPO法人京都景観フォーラム専務理事の森川宏剛さんに、リモート社会における地域まちづくりのあり方についてうかがいました。

－現在のコロナ禍は地域まちづくりの活動を変えてしまうのでしょうか。

森川：まだ分からないけれど、変わるだろうなという気はしています。現状は活動をほぼ停止している地域もたくさんあります。リモートでのコミュニケーションは、これまで地域活動の中心だった世代の人間には難しい。活動の停滞が長く続くと、無くても別に困らないじゃないかと捉える人が増えてしまわないかと懸念しています。もう一つの側面として、コロナで経済格差が開き、地域活動の中心だった中流層が減ってしまうのかな、と。一方で、身の丈に合った暮らしをしながらつながりをつくって支えあっていこう、という若い人が増えてきて、今までとは違う協働の形が現れるのではないかと期待もしています。

－京都景観フォーラムでは会合やセミナーなどでリモートを活用されていますが、実際に経験してリモートならではの利点は感じましたか。

森川：地域活動に関していえば、感染のリスクを減らす以外に利点は感じないですね。地域でもオンライン会議をやってみたのですが、時間と場所の自由度は上がるものの、対面とは圧倒的に情報量が少ないですね。普段の関係性がある人同士ならまだ会議らしくもなるのですが、新しくまちに来られる人と初顔合わせする場合など、その人がどのような人物かを推しはかることはなかなかできない。普段いかに非言語情報をたよりにしているか、ということです。もしかしたらオンラインでもコミュニケーションを取れる人達がこれから現れるのかもしれない。技術の開発も進むでしょうし。ただ、今の段階ではなかなか難しいなと思います。

－コミュニケーションの手段でない活用法、例えば地域会合に参加したことのない人向けに会合を中継するといった方法は有効でしょうか。

森川：確かに、最終的にはリアルな関係につなげることを意識しながらリモートを利用することは有効かもしれないですね。うまく使い分けていけばいいのだと思います。ただ、今はついついリモートに傾きがちなところを、あえてリアルで行うことが地域まちづくりでは必要なんじゃないかな。例えば連絡一つでも顔をあわせて雑談もしたりすることが関係づくりにいきたりしますよね。一見無駄に見えてもリアルで行う意味をちゃんと共有することが大事なんじゃないかと思います。そうやってオンラインも活用しつつ、リアルのコミュニケーションを積み重ねていった先に信頼関係が築かれるのではないでしょうか。

京都景観フォーラムによるセミナーのオンライン生配信の様子

もりかわ ひろよし
森川 宏剛 氏
NPO法人京都景観フォーラム専務理事
2013年までまちセンのまちづくりコーディネーターとして活動した後、現職。地域活動の支援を行いながら、京都景観エリアマネージャーの養成など地域支援のネットワークを拡げる取組を進めている。

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2020　アソシエイテッド・プログラム

展覧会「Machiya Vision」を開催中

当財団では、KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭との共催で、KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2020 アソシエイテッド・プログラムとして、展覧会「Machiya Vision」を開催しています。

本展覧会では、総勢20以上の個人や企業にご協力いただいたインタビューを通して、長い歴史の中で育まれた文化の中に、軽やかに新しいものを取り入れて楽しむ、京町家に暮らし、働き、支える人たちの現場の声をお届けします。会場では、インタビュー映像と京町家での生活や活動の様子を捉えた写真や映像で構成したインスタレーション作品を展示しています。

2019年の第7回までで国内外から延べ70万人以上の来場者数を記録するKYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭とのコラボレーションを行うことにより、京町家の魅力や多様性を受け入れる都市住宅としての可能性を、再認識していただく機会となることを願っています。

入場料 無料
参加申込不要

展覧会「Machiya Vision」概要

開催期間：2020年9月3日（木）～9月30日（水）
時　　間：午前10時～午後11時※（最終日は午後6時まで）
※新型コロナウイルス感染拡大状況によって、変更する場合があります。
会　　場：大垣書店 京都本店 イベントスペース　ー催ー
（京都市下京区四条通室町東入函谷鉾町78　SUINA室町1F）
協　　力：大垣書店

インタビューにご協力いただいた皆様

市川陽介（市川屋珈琲店主）、糸六株式会社、大場修（京都府立大学大学院教授）、小畑英明（公益財団法人日新電機グループ社会貢献基金理事長）、北井秀昌（株式会社北井代表取締役）、五条坂なかにわ路地、佐藤知久、佐藤文絵、ジェフリー ムーサス（Geoffrey P. Moussas）（建築家、Design1st）、清水香那（STARDUST店主）、下村敏和（町家居住者）、Sansan Innovation Lab、ダイモンナオ（イラストレーター）、野口琢郎（箔画作家）、ブノワ ジャケ（Benoît Jacquet）（フランス国立極東学院准教授、国立パリ・ラ・ヴィレット建築大学客員准教授）、前田昌弘（京都府立大学大学院准教授）、光田彰（京都建築専門学校講師、京・町屋工舎代表）、森紗恵子（谷村邸／つづれ織工房おりこと）、矢島里佳（株式会社和える代表取締役）、山崎順也（スプリングバレーブルワリー株式会社店舗責任者、マーケティングディレクター）、山脇直人（Sansan株式会社 DSOC ブランドクリエイター）、横井邸、若村亮（株式会社らくたび代表取締役）
※敬称略、五十音順

※インタビュー映像はホームページでもご覧いただけます。

http://kyoto-machisen.jp/machiya-vision/

次世代につなげたい、京町家で育まれる文化と想い

皆さんに共通して感じるのは、古い建物や町並み、そしてそれを守り続けてきた人々に敬意を払いながら、建物を継承しようとする強い意志です。インタビュー取材では、「京町家に住まうことで、京町家をつくった職人の技に日常的に触れられることも魅力の一つ」、「伝統文化を守っていくことは、守りだから保守的な取組のように思うのですけれども、実はそれは京都にとっては、非常に大事なイノベーションではないか」、「住んでみてはじめて、先代がどれほどこの家を大切にしてきたかを知りました」と語って下さった方もいらっしゃいました。

京町家の「素」の姿を取材

取材の際には、普段は見られない個人の生活、仕事、創作の場としての京町家に伺いました。「仕事の合間の気分転換に庭掃除をします」、「この壁の美しさに恋をしました」、「大きな古時計の音を聞きながら時を過ごします」など日々、愛着をもって過ごされている様子も窺えました。

KYOTOGRAPHIE
京都国際写真祭 2020について

世界屈指の文化都市・京都を舞台に開催される、日本でも数少ない国際的な写真祭。国内外の重要作家の貴重な写真作品や写真コレクションを、趣きのある歴史的建造物やモダンな近現代建築の空間に展示している。2020年の秋で第8回目を迎え、テーマは「VISION」。今年は新型コロナウイルス感染症の世界的拡大により、開幕を4月から9月に変更し開催。
https://www.kyotographie.jp/

まちセンコーディネーターそれぞれのリモートワーク

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言から始まった今年度。自粛から始まる社会活動の制限はわたしたちの暮らしに様々な課題を投げかけ、当たり前の暮らしについて見つめ直す機会を与えられました。
リモートワークの期間中、まちセンコーディネーターも、それぞれに思い、考えています。

バーチャルの世界が発達すればするほど、リアルの価値が高まる、という話を聞いたことがあります。様々なツールのおかげで、バーチャルで多くの用は済みますが、これまでにない行動の制限が課せられている今こそ、リアルの価値がジワリと上がっているのではないかと思います。（A・H）

この間、一気にオンラインでやり取りすることが広まり、遠方の人と毎週のように打合せで顔を合わし、距離や時間がぐっと近づきました。仕事しながら自宅時間を充実させることができるという新しい働き方を実践するよい機会でした。一方でその環境下にない方々との情報格差が広がっていくばかりなのが気掛かりでもありました。
これからは、感染症がすぐそばにあることを意識しながら最大限に気を付けた上で実際の交流、新たな活動へシフトしていきたいと考えます。（J・K）

今年の4月に見た光景を忘れることはないでしょう。桜は満開なのに観光客の姿はなく、店はシャッターを閉めたまま。地域会合の中止も続き、人と人のつながりこそ、まちづくりの基礎と信じていた私はショックを受けました。
緊急事態宣言の解除後は、三密を防ぎながら会合が再開されています。オンライン会議も経験しましたが、まだなじめません。自分がどれほど、人と会って話をし、つながることを求めているか、よくわかりました。（K・T）

4月にコーディネーターとして採用され、さあこれから、という時、緊急事態宣言でまちセンは休館となりました。人の訪れない静かなフロアで、「不要不急」とはなんだろう、と考えさせられました。
先の見えない時代、コーディネーターとして何ができるのか、考え続けたいと思います。（T・K）

コロナ禍により、在宅ワークが推奨されました。在宅ワーク…言わば、新しい職住共存の生活と言ったところでしょうか?
これまで、そのような環境になじみがない中で、その難しさを感じました。自宅で職場のメールが見られなかったり（ネットワークの問題）、作業に必要な資料や設備がなく、仕事が捗らなかったり（情報セキュリティーの問題、作業環境の問題と信じたい）…等、生活空間であるワンルームを急に職場化する難しさ。
再来するであろうコロナ余波に向けて準備できればと思います。（N・I）

コロナウイルスの影響により、いままでの働き方の変化を求められました。初めは戸惑いを覚えましたが、時間やタイミングがなくてできなかった、仕事の効率化、オンライン会議の活用、職場内のコミュニケーションなどいままでの当たり前を見直すいい機会となりました。このような事態を前向きに捉え、挑戦していくことが必要だと思います。（H・M）

3月末で前職を退職し、4月から6月は地元山梨にてオンライン求職活動をしていました。平時なら東京で行う面接や講演会がオンラインになったことで、都会と地方の格差を減らすいい機会になったと考えています。また全国各地の友人たちともオンライン飲み会を通じて話せたので、孤独感はむしろ普段よりも少なかったです。一方で、初対面の人と打ち解けるためのハードルはリアルよりも高く、手法の開発には至っていないと感じました。（M・K）